

“村へ”

場所：フィリピン、レイテ島の農村部

日：2016年3月5日から18日

名前：廣瀬 直紀（4年）
 目的：フィリピン大学パロ分校の医学生と共に農村部に滞在、医療資源の足りない地域で医療者に何ができるかを学ぶ

渡航先での活動内容

“We need commitment”、フィリピン大学パロ分校（以下、UPパロ）の医学生であるDr. Ianの言葉から、レイテ島での研修が始まった。UPパロの特殊なラダーシステムと今回の活動内容の紹介を通して、Commitmentについて考えてみる。

UPパロはフィリピンの医療者の海外流出を防ぐと共に、絶対的に医療者が不足しているCommunityに医療者を供給するために設立されたコースである。そのカリキュラムの最大の特徴は10年かけて助産、看護、医学を学ぶラダーシステムにある。10年の学びを通して学生はCommunityへのCommitmentを常に自覚しなくてはならない立場に置かれる。

1.ラダーシステム(右図参照)

学生は10年かけて助産、看護、医師の順にカリキュラムをこなす。かかる期間は順に2年、1年3か月、5年。なお、それぞれのカリキュラム間には“Serve”と呼ばれる期間がある。カリキュラムを終え、免許を取得した学生は、プロとして自身のCommunityへ帰り、奉仕するのだ。では医師のカリキュラムを例に取って、ラダーシステムを詳しく見ていこう。この5年間のカリキュラムは、基礎を学ぶ前半の4年と、コミュニティの診療所で暮らす後半の1年の2ステップに分かれる。基礎において学生は1週間のうち4日は教室で座学をし、残る2日は病院かCommunityでその知識を実践する。教室と現場の往復だ。そこで医師としてのスキルを獲得したのち、1年間の診療所暮らしに入る。この時点で既に学生はスタッフや村人からドクターと呼ばれ、独り立ちしたドクターとして、そしてリーダーとして活動することを求められる。Communityでの研修は、学生の学びとともに、Communityに医療者を供給する目的も兼ねているからだ。

私は今回の研修で、医学生とともに2か所の村の診療所で合計10日間暮らすことになった。

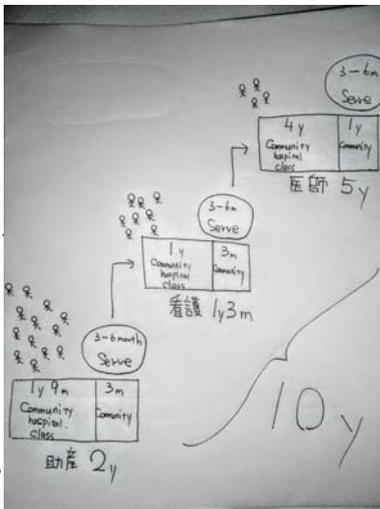


図1. ラダーシステム

～村で暮らす～

“トイレは時にシャワーに、キッチンに”

“村”

“プライバシーはない、学生はみな兄弟”

学生は10年間のうち合計で約2年間を村の診療所で暮らす。村の暮らしを知り、村人の目線から健康問題を捉える。そして、村をmanageする方法を学ぶ。私も村での度重なる停電や、たむろする野犬、高糖質・高塩分の食生活などに触れ、その地にはびこる問題にわずかながら触れる機会を得た。

～診療所編～

週に3日は無料のconsultation day、医学生は9時から12時までひっきりなしに訪れる村人を自力で診察する。その数100人以上。私も彼らの横につき、診察の根拠や、薬や医療機器が不足している中での対応方法を1件ずつ細かく教えてもらいながら見学した。

薬は貴重。そして薬があっても、村人はお金がなく買えないこともしばしば。だから学生は薬辞書にとらめっこしながら一番安い薬を探し、村人に提案する。「それでも薬が買えなければ？」と質問してみた。その学生は自主的に伝統医療のNGOに参加し、薬草と針治療を学んできたそう。その学生の中に、自分から村人に歩み寄ろうとするCommitmentの姿勢を見た。

学生は診療所生活の間、毎日24時間On call。「いつでも診療所にいる」ということが、村人から信頼を得ることに繋がるとのこと。この日は一晩で3件の緊急Callが。私も夜間と早朝の2件ほど救急車に乗り、患者のもとへ。しかし患者にアクセスするまでに30分ほどかかる。道が悪く、救急車を持たない診療所もあり、そこでは脳や心臓の急患では間に合わないことも多い。

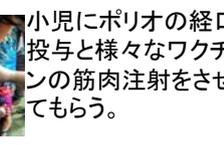
* さらに助産（臍帯切断と胎盤娩出）を経験した。

～出張編～

2日に1度は他の村へ出張。しかし、その道険し。バイクの5人乗り、車の天井乗りは当たり前、時には舟で川を下り、時には山を6時間かけて歩く。医療を届けるには道と体力が必要なのだ知った。診療所長に「診療所に最も必要なものは？」と聞くと、「道。」との答えが。

村人にとっては貴重な診察日。続々と訪れる。私も簡単なワライ語でプロファイリングをお手伝い。

栄養不足についての健康教育。村人が普段食べる食材から、栄養価に合わせた食事を提案する。



小児にポリオの経口投与と様々なワクチンの筋肉注射をさせてもらう。

出張時は毎回、村長の家で食事。学生は村の長と関係を築き、何気ない会話から村の問題を読み取る。

<h4>目的を達成できたか</h4> <p>医療資源が乏しい村で医療者に何ができるのかを学ぶため、レイテ島を訪れた。ないのならば、あるもので何とかするしかない。だから医療者は自分から村に飛び込み、頭と身体で問題を感じ、使える資源を捉える。そんなCommitmentの意思と技術が大切なのだと知った。</p>	<h4>目的以外に学んだ点、反省点</h4> <p>資源が乏しいからこそ、医療者の心が育つと感じた。</p>	<h4>将来の進路決定にどう影響したか</h4> <p>それは未来にならないと分からないが、卒後、まずは看護師として十分な技術を身につけねば、そして日の当たらない医療資源の乏しい現場で働きたい、という自覚が強くなったように感じる。お金がなく教科書は全て印刷か図書館、ユニフォームはおさがりという状況でも、懸命に患者と村のために励んでいた学生の姿が心に残る。</p>	<h4>後輩へのアドバイス</h4> <p>良いことも悪いことも、やりたいことをやりたいたけやるといいと思う。</p>
<h4>グローバルな視点とは何か</h4> <p>距離や危険に関わらず、「ここに行かねば」と感じたら、どこへでも行きたい。そうするうちに、自分の中に自然と振れ幅ができていくように感じる。</p>	<h4>研修支援制度に望むこと</h4> <p>素晴らしい制度だと思う。これ以上望むことはない。不安が強い中で、自由に旅をさせてくださり本当にありがたい。</p>		